



中国がわかるシリーズ 7 諸子百家(後)

ライフネット生命株式会社 社長 出口 治明

孟子と同時代の荘子(BC369～286 頃)は、老子(孔子より少し年配であったと考えられています)の無為自然思想を、一層発展させました。荘子は、寓話や警句(胡蝶の夢、大鵬、井の中の蛙大海を知らず等)を多用して、人為を遠ざけ、ありのままの世界(自然)を受け入れることを主張しました。そこでは、上天・上帝信仰が全く見られず、性善説も性悪説も、ともに無意味なものとして排斥されます。おそらく世界最初の実存主義者であり、人間を自然・生物界の中に相対化した生態学者であったのではないのでしょうか(DNAを予見したと言えなくもありません)。荘子は、タオイズム(老荘思想、道家)を大成しました。道家は、本来は上人を対象として哲学的思惟を説いたものであり、中人以下を対象とした法家と共存していましたが、後には、統治者の儒教に対して、野の中国社会、民衆の通奏低音となっていきました。この2つの相反した潮流は、中国の精神世界を、結果として、安定させたように思われます。

儒家の荀子(BC298～238 頃)は、性悪説を唱えましたが、それ故に、教育の重要性を指摘したのです(なお、孟子は中人以上について性善説を述べ、荀子は中人以下について性悪説を述べたので、両者は矛盾するものではないと考える説もあります)。著書、荀子は「出藍の誉れ」の書き出しで始まります。自らも優れた教育家であった荀子の門下からは、法家の韓非子や李斯が出ました。

この他、論理学者の公孫竜(中国のソフィスト)や、古くからあった陰陽説(自然現象は、月と太陽、女と男のように陰と陽の対立・相互作用から生じると唱える)と五行説(自然界は、木・火・土・金・水の5元素から成るという自然科学で、元来は齊の地で生れた思想でした)を統合した鄒衍(すうえん)等が出ました。また、楚の政治家、屈原(BC343～277)は、「楚辞」を著しました。楚辞には、北方の「詩経」とはまったく異なる南方の民謡の息吹が伝えられています。秦に抗して洞庭湖の汨羅に身を投げた屈原は、長く楚の民族英雄となりました。なお、詩経や楚辞には、(唐詩などに比べて)非常に多くの草木名が読み込まれており、中国にも鬱蒼とした森林の時代があったことを示しています。

諸子百家は、それぞれの得意分野を持つ専門家集団であり、基本的には棲み分けが可能であったように思われます。それを要約すると、現実の世界をリードした法家、兵家に対して、大国の政



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

治を説き、文明の進歩を楽観視した儒家と、文明による自然破壊を憂い、小国の立場を重視した墨家(前回、お話したように、秘密結社的な色彩が濃厚です)という2大野党、それに近代的、個性的な(知識階級の)道家という構図になるのでしょうか。

註:「五行説」五方説とも云われる古くからある観念で、方位にも用いられた。中央=黄、東=青(蒼龍)、南=赤(朱鳥)、西=白(白虎)、北=黒(玄武)である。(3皇)5帝、春秋5覇、5胡、5代(10国)などは、五行説の影響であると思われる。漢代以降は、王朝の交替も、木=青、火=赤、土=黄、金=白、水=黒のサイクルに従うものと考えられるようになった。なお、白ロシア(ベラルーシ)は、ジュチ・ウルスが、西方のロシアを指した名称であり、五行説の影響が見られる。